

## ■ムサシ、贖罪売春で童貞ショタにガチ墮ち

私は女剣士ムサシ。  
ユイたちに敗れた後、平和な世界で贖罪のためにできることを探し……  
思いついたのは、私のせいで迷惑をかけた被害者への奉仕であった。

とはいえ、被害者にできることなどそうあるものではない。  
ある一人の被害者と話し合いをした結果、妖魔と化していた頃の経験を活かし、肉奉仕をすることになった。

しかし、相手がまさかこんな少年になるとはな…  
少年にとってみれば、私は性格はともかく外見は理想のものらしい。  
未だ童貞で、私による被害がトラウマとなっておりまともな恋愛ができずにいたようで……何でも、最初の相手は是非私で……ということだ。  
複雑な事情だがこちらが加害者側である以上、文句は言えない。  
改めて挨拶をすると、少年の服を下ろして下半身を露出させる。

「っ?!」

すると、少年の体格には不釣り合いなモノが現れる。  
これは……本当に、童貞……なのか?  
私の妖気が影響してこうなっただけが……

「だ……大丈夫だ……」

心配する少年を安心させようとするが、ゴクリと喉が鳴ってしまう。  
……私も元は妖魔だ。  
修業として妖怪たちに手を掛ければ、ことあるごとに、様々な妖怪に犯された。  
その経験ゆえに、モノを見ただけで経験数や勢力が見て取れるようになったのだが……  
——この少年のものは、規格外だ……!

「じゃあ……まずは、手で扱くぞ……」

軽く手で握ると、掌に熱が伝わってくる。  
それだけで少年は軽く唸る。だがやはり淫気のせいで精力は尋常ではなく、扱いてもなかなか達しそうにない。

「次は……胸だな……」

自慢……ではないが、一般のそれとは大きくサイズが違う胸——爆乳——で挟み、扱く。  
……熱い。  
やはり少年の肉棒は凄まじい精力で、焼けるように熱く充血している。  
しかも、自慢の爆乳でも収まりきらない。  
そんな巨根を胸で包んで扱けば、まるで犯されているかのような錯覚に陥ってしまうほどだ。

「んむぐうっ?!」

巨根を扱いていると、流石に射精が近付いてくる。淫気による精力で我慢できているが、童貞に私の胸奉仕は充分すぎるほど刺激的な筈だ。  
だが刺激を与えすぎてしまったか、興奮した少年によってはみ出た鈴口に顔……口を押さえ付けられる。  
胸と口による同時奉仕。強引な行為だが、私はつい悦んでしまい、少年の射精に合わせて吸い付いてしまった。

ビュル♥♥ ドブ♥♥ ドブブッ♥♥

「んんっ♥♥ ん♥♥ んふううううっ♥♥」

少年の行為はマナー違反。にも関わらず、自ら精液を飲んでしまう。  
悔しいが、自分の中に湧き出た性欲を満たしたかった、というのもある。  
しかし、やはり少年の欲求をいち早く満たしたい、というのが大きかった。  
これだけやれば、普通の童貞は満足するだろう。そう思えたが……

「まだ満足しないのか……」

驚くべきことに、全く精力が衰えていない。  
前戯で満足させられないなら……本番しか、ない  
少年はもちろん……私も、不覚ながら、欲していた……

巨根に避妊具を付け、少年の上に跨る。

「……挿れるぞ……」

薄皮越しに、龟头と陰唇を宛がい……

ずぶんっ♥♥

「んあっ♥♥」

体験版はここまでです。続きは製品版で！